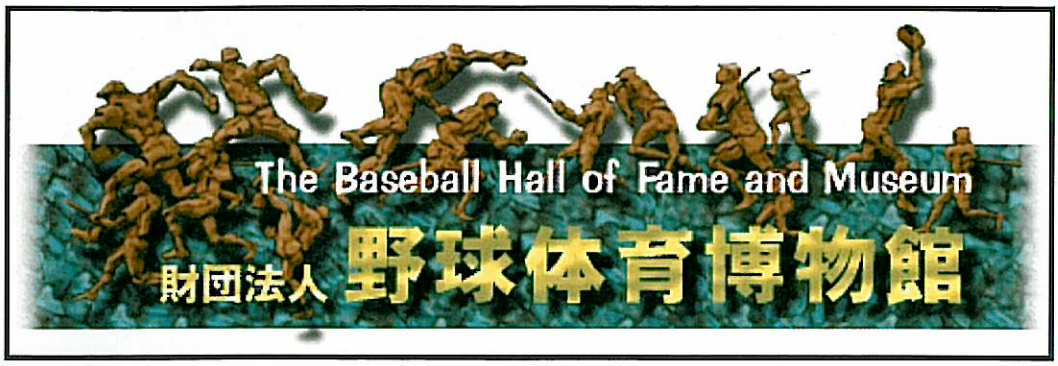
平成13年3月13日第三種郵便物許可　2008年4月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）
Newsletter

THE BASEBALL MUSEUM SINCE 1959
Vol.18 / No.1



野球体育博物館が目指すもの

事務局長　佐藤　宏

「博物館」というと収蔵品の展示が主体という観念があり、どうしても古色蒼然というイメージがつきまといがちです。一方で「野球」という言葉からは投打走守のあふれる躍動感あるいは一瞬の先が見えない緊迫感が伝わってきます。この２つの感覚を調和させ、懐かしさとワクワク感を融合させて、来館者の方々に楽しんでいただく、これが私ども野球体育博物館の永遠のテーマであると考えております。

人の数だけ歴史があり、セピア色の思い出があります。最初の子が生まれた年にどこのチームが優勝し、どちらが日本シリーズで覇を唱え、だれが活躍したのか。そのとき活躍した選手の名前の一字を貰い子供の名をつけた等々、他人にとってはどうでも良い話も、ご本人にとってはかけがえのない思い出でしょう。１枚の写真が紡ぐさまざまな思い出。

従来、写真は展示するのが難しい収蔵品の一つでありました。一度に多くの人が見られない、スペースが必要な割にインパクトが小さい、写真自体の保全・管理に手がかかる。しかし、こうした問題も写真を静止画像化することで、ほとんどクリアすることができるようになりました。サイズも拡大・縮小思いのままです。あとはタッチパネルを操作することによって、お客様に見たい写真を選んでいただく。現在は1951年以降に行われたオールスター戦の出場者の集合写真、各年のポスターを収蔵品紹介コーナーでご覧いただくことが可能です。今後さらに静止画像の収蔵点数を増やすべく努力を続けたいと考えております。

前世紀から今世紀にかけての技術革新のなかで、特筆すべきは映像技術面の顕著な進化・進歩でありましょう。当館の収蔵映像も古くは16mmのニュースフィルムに始まり、ビデオテープ、DVDと変遷を遂げてまいりました。冒頭でも記しましたが、躍動感、緊迫感を伝えるうえで映像は欠かせない要素であります。「百聞は一見にしかず」ではありませんが、どんな冗長な説明よりも、一瞬の映像が優ることもあります。今般、私どもは当館が保有する全ての映像をデジタル化するための作業を進めております。これはいつでもお望みの映像をクリアな状態でご提供できるというサービスを目指したものです。併せて館内のスクリーンの大画面化も検討していきたいと思います。

温故知新の反対になるのでしょうか。新記録の達成や新たな名場面の誕生が過去の記録や記憶を喚起させ、それらがまた話題になるという現象は、今までもありましたし、これからも続くでしょう。そうした意味からも、記録と記憶の集積の場所である図書室の存在はより大きなものとなります。当館の図書室は昨年暮れリフレッシュを施し、明るく居心地の良い空間をご提供できるように努めております。５万冊におよぶ蔵書を擁しており、司書にご用命いただけばその全てを眼にすることができ、またコピーをとることも可能です。ぜひご活用ください。

このように博物館とはいいながら、懐かしさとワクワク感が同居した不思議な空間、従来からの収蔵物展示機能に加え、映像機能、学習機能も充実させつつある多機能空間、私ども野球体育博物館にぜひお気軽に足をお運びください。

2008年度の野球体育博物館はこんなことをやります！

博物館ではご来館の皆様に野球を楽しんでいただく場所として、さまざまなイベントや展示などを行っています。野球ファンの皆さまと野球界をつなぐ架け橋になるよう、今年度は次のような事業を計画しています。ぜひ皆さんご来館・ご利用くださいますようお願いいたします。

●「イベントホールの改装」

小・中学生に特に人気の高い、バッターボックス体験やバットやグラブに触れるHands-Onコーナーがあるイベントホールを、より楽しく遊び、学べるコーナーになるよう改装します。

●「野球殿堂入り表彰式」と「野球殿堂入り特別展」を行います。

今年1月に野球殿堂入りが決まった山本 浩二氏、堀内 恒夫氏の殿堂入り表彰式を8月1日のオールスターゲーム第2戦に、嶋 清一氏の表彰式を夏の甲子園大会開催中の甲子園球場でおこないます。また、夏休み期間を中心に、本年度顕彰者の方々のゆかりの品や写真などで功績を紹介する野球殿堂入り特別展を行います。

昨年の殿堂入り表彰式→

●夏季特別展「野球とオリンピック」（7月上旬～9月）を行います。

オリンピックでの野球の歴史を紹介し、8月の北京オリンピックに出場する日本代表を応援します。

●企画展を行います。

「世界に広がる野球」（開催中　6月22日(日)まで）、「名選手のバット展」（9月～11月）、「子供の遊びと野球」（11月～2月）、「WBC展」（2月～5月）を行う予定です。

●学校教育との連携で、学芸員の実務実習を受入れます。

夏休み期間中の実習は、主にイベントの手伝いを、そのほかの期間は学芸員の業務の補助を予定しています。来館者・実習生・博物館の3者にとって有意義な実習となる内容を考えています。

●夏休みのイベント

小・中学生を中心に、楽しく野球のことが学べる用具製作実演や親子グラブ製作教室、自由研究の相談受付などを行います。

昨年のバット製作実演と自由研究のようす

▶▶2008年維持会員を募集しています。

当館は野球専門の博物館として、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万冊を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

1．会員の特典

(1)当博物館発行「ニュースレター」(季刊) 送付します。
(2)無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
(3)アメリカの野球博物館（クーパースタウンにある）にも無料で入館できます。
(4)会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
(5)イベント情報などを優先的にご案内します。
(6)博物館で販売している商品が10%引きになります。

＊新個人会員には上記の特典のほか、『野球殿堂 2007』を進呈します。

＊新ジュニア会員には上記の特典のほか、「野球体育博物館オリジナルピンバッチ」を差し上げます。

2．会員の種類と会費

年会費（4月～翌年3月迄）
法人会員　1口　10万円　　個人会員　1口　1万円
ジュニア会員（小・中学生）　2,000円

ご入会月により、初年度年会費の割引があります。

ご入会月	4月～9月	10月～12月	1月～3月
維持会費（個人会員）	10,000円	5,000円	2,000円

3．ご入会の方法

①館内にあります「維持会員募集のご案内」の“入会申込書”に、必要事項をご記入のうえ、係りにお渡しいただくかお送りください。
「維持会員募集のご案内」は郵送もいたしますので、ご希望の方は博物館までご連絡ください。
②“入会申込書”が届きしだい“維持会費のご請求書”をお送りしますので、維持会費をお振込みください。

お問い合わせ　博物館 業務部　嵩城（たかき）・竹内
皆様のご協力、よろしくお願い申し上げます。

殿堂入りの人々を語る(19)

「“父”のおしえ・“おやじ”の教え」

藤田　喬（藤田 信男氏 次男）

1987年殿堂入り
藤田 信男氏レリーフ

1992（平成４）年4月26日㈰のスポーツ新聞各紙は、伝説の歌手・尾崎豊氏と父・信男の前日急逝を一斉に報道。奇遇にも当ニュースレター発刊日が17回忌の祥月命日であり亡父への供養の心も込めて起草。何故なら藤田 信男は私の“父”であると共に、今尚、法友野球倶楽部の皆様の“おやじ”でもあるので。

私は兄が夭折翌年1946（昭和21）年に父43歳・母39歳で二姉妹の下に誕生。母は第五代野球部長佐々木 良一の姪。麻布で生まれ育ち新井薬師球場の地に嫁ぐ。部長は法学者。父が「盗塁のサインが出し辛い」逸話も。余談だが異母姉も野球殿堂入のお方とご縁と聞いた。

最多優勝校法政も、1925（大正14）年秋の第一回リーグ戦は最下位。父が監督の1930（昭和５）年秋リーグ戦で悲願の初優勝！当時斬新な父のノウハウの下、猛練習に耐えた選手と地元密着の成果。合宿もあった上高田（東京・中野）の地に父母の思い入れ深く“父”のおしえで今も私は此処に暮らす。父は長男で1922（大正11）年に伊丹中から法政に。外野手、主将、修士に籍を置く学生監督として“第１期黄金時代”を三男の藤田 省三（近鉄パールス初代監督）と築く。自は終生アマチュア一筋。1975（昭和50）年春の叙勲（従五位勲四等旭日小綬章）を素直に喜ぶ。“法政野球三羽烏”とは同じく野球殿堂入の知将・松永 怜一氏が手塩に掛けた富田・田淵・山本氏。奇しくも私と同い年。遥か昔1925（大正14）年春、法政のスコアボードに“藤田三兄弟”（二男は母方姓の和田 謙吉）が同時に並んだ“３”に纏わる奇縁か。「早大に記録的大敗で外野に立ち尽くした」忍耐と挑戦の心を語ってくれた、“父”のおしえは尊い。

ノウハウは先覚の早慶に学ぶ。「学生野球は遊びでは無く教育の一環」の早大・飛田翁の教え。スポーツトレーナー治療メソッド確立の小守氏を重用した慶大・腰本監督の先見性。選手の為になる事は柔軟に取込む進取の気質。校歌♪よき師・よき友♪の実践が見える。清国・天津で『料亭敷島』を営み、“戦車をお国に贈った”女傑伝説の祖母は三兄弟と姉妹を次々と大陸から本土に。とりわけルーツ探求米国武者修行に遠征団を外国航路の１等船室で行かせた財政支援は、結果『何事も１流に成るには１流の体験』『基本の会得こそが野球上達の秘訣』と悟った、“おやじ”の教えとして今でも法政野球に健在は嬉しい。

野球の国際化進展。日本人初の大リーガーSFG（サンフランシスコ・ジャイアンツ）村上投手（法政二高）出現以降和製大リーガー誕生。日米大学野球選手権・五輪・ワールド・ベースボール・クラシックと大きな潮流。時代の変遷にかかわらず“おやじ”の教えの５施策はいまだ色あせず法政の礎として伝統の継承が心強い。①【スカウティング】「当時は早慶の牙城でない東北・北海道も視野に新規開拓。更に海外の日系人に着目」②【リクルーティング】広報活動の一環に、“全国区”的な知名度向上が図れるNHK職員への文武両道選手の育成③【ボランティア】60有余年の歴史ある＜丸の内軟式野球大会＞へ部員のお手伝を通じ社会貢献。＜朋心会＞地元密着型に発展も④【コミュニケーション】天津生れで中・英・日３ヶ国語を操る、「野球の原書を読むインテリ野球人」（江本 孟紀氏ブログ）は、“野球でなくBase Ball”が信念、“東京六大学でなくBig Six”が誇りで口癖⑤【ファンダメンタル】イリノイ大C・L・Lundgren著『BASEBALL NOTES: for Coaches and Players』を、戦前1932（昭和７）年に岩波書店から翻訳し紹介。―ゴロの守りから入る―「正しい野球」の「正しい指導」は、今春拡張改装されたBig Sixのメッカ神宮球場対応の新たな法政野球の進化の隠味的象徴。

“父”の遺伝子の影響か私はヤマハスポーツ事業運営、還暦後は認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本総務でスポーツを身近に感じる生業に従事。父が生前にお世話に成った皆様にあつくお礼申し上げます。

知ってほしいこんな資料（62）

フィンランド式野球（ペサパッロ）のバットとボール

バット：長さ 105㎝、重さ 630ｇ
ボール：重さ 140ｇ、直径 7㎝

野球体育博物館には、一組のフィンランド式野球のバットとボール（写真）があります。1959年の開館時に、田尾 栄一氏から博物館へ寄贈されたものです。1983年に寄贈者の田尾氏に由来を伺う機会があり、昭和10（1935）年ごろに八田 一朗氏（第三代日本レスリング協会会長）がフィンランドで入手し、スポーツ資料収集家でもあった同氏に贈られたものとのことでした。

フィンランド式野球は、フィンランドではペサパッロ（Pesäpallo）と言われ、米国で野球を見たラウリ・ピヒカラ氏（Lauri Pihkala　1888～1981年）が考案し、1922年に最初の試合が行われたと言われています。ホームベースを長くしたような５角形のグラウンドで、投手は打者の横にいてボールを投げ上げ、ランナーは先ず斜め左側にある一塁へ走り、次に斜め右側の二塁へ、さらに左に向かい三塁へ進むなど…私たちの知っている野球とはかなり違うようです。

当館の夏季特別展『野球とオリンピック展』（北京五輪に合わせて７月上旬～９月開催予定）のため、オリンピックの公式報告書をいろいろと調べている過程で、1952年のヘルシンキ大会で行われた「公開競技の野球」は、フィンランド式野球が公開競技のうちの1つである「開催国の国技」として採用されたもので、考案者のピヒカラ氏が始球式を行っていたこともわかりました。

ヘルシンキ大会は日本が戦後初めて参加したオリンピック大会でもあり、八田氏も本部役員として参加しています。もしかしたら、八田氏ご本人もヘルシンキでこの公開競技のフィンランド式野球を観戦されていたかも知れません。

＊オリンピック各大会の公式報告書は
LA84Foundationのデジタルアーカイブズ（http://www.la84foundation.org/5va/reports_frmst.htm）で見ることができます。興味のある方はぜひご覧下さい。

学芸員　新　美和子

コラム／博覧・博楽 (26)

武方　浩紀（野球体育博物館維持会員）

私が野球との思い出を語ろうとすれば、伯父のパンチョ伊東を抜きには語れません。きっと言わなければ夢にまで出てくることでしょう。というのも、そもそも野球を好きになったきっかけは伯父が作ってくれたものでした。初めて球場に足を踏み入れたのは所沢の西武ライオンズ球場。まだ、小学生の時です。1980年代から黄金期を迎える西武ライオンズとは、全くかけ離れた弱小チームでした。福岡から移転してきたばかりのライオンズの監督は故根本 陸夫さん。伯父と一緒に行くことで根本監督、選手の方々、審判、連盟の方々にとてもよくしていただいたのを今でも覚えています。

また、当時の野球漫画といえば水島 新司先生の「ドカベン」「あぶさん」でした。普段は漫画を読むなと言っていた伯父が突然、家に持ってきました。不思議ですが酒も飲めないのに夢中になって読んでいたのは「あぶさん」。今はなき南海ホークスです。水島漫画を読みながら登場人物を本人と似ているかを比べて喜んでいました。大阪球場でも観戦したことがあります。当時の穴吹 義雄監督、門田 博光さん、香川 伸行さんからバットをもらったりして喜んで応援していました。先日つい懐かしくなり、関西の友達と一緒に大阪球場跡を見てきました。難波駅からしばらく歩くとホームベース跡があり、その上には緑色の鷹があり、久しぶりに球団ロゴを見ることができました。目の前には芝の香り、急勾配の擂鉢型（すりばちがた）のスタンド、土のグラウンドが瞬く間に広がってきました。今となってはショッピングセンターになっているエリアも、これまでの歴史を物語るには十分に立派な空間でした。

川崎球場では、村田 兆治さんの力強いピッチングを観戦しました。テンポ良くキャッチャーミットに収まる心地よい音を聞きながら食べた川崎名物、肉そばのおいしさは今でも覚えています。阪急ブレーブス主砲のブーマー・ウェルズさんがお店の前で肉そばを試合前に食べているのを遠くから見ていたのもいい思い出です。あまりにも大きかったので近寄れませんでした。山田 久志さんのアンダースローから織りなす芸術的なピッチングもよく見ました。特に、西武球場で行われたオールスターゲームではブルペンで山田 久志さん、村田 兆治さん、東尾 修さんが並んで投げていた場面がありました。当時のパ・リーグを代表するエース同士が並んで投げる豪華なオールスターゲームでした。

1987年の夏には人生初めての海外旅行をしました。伯父がアメリカに連れていってやるというので観光だと思って即OKしたら、MLB観戦ツアーでした。アトランタ、シンシナティ、サンフランシスコと3都市をめぐる野球の旅を経験しました。ここでも伯父の行くところ行くところで球団関係者の歓待を受け、英語がわからない私もとりあえずついていき食事し、いい思いをさせてもらいました。球場にいると誰かが必ず話しかけてきて楽しそうに話しこんでいる、そんな伯父の姿が浮かんできます。アトランタでは球団秘書の女の子とサザン・ドロール（南部訛り）で楽しそうに話したり、デトロイトでは著名アナウンサーのアーニー・ハーウェルさんと「風と共に去りぬ」を真剣に話し合ったり、誰とでも簡単に友達になる術を持っていました。極端ですが、泊まっているホテルのウエイターとも話しこんでいました。「俺は誰とでも簡単に友達になれる。アメリカではこうしないとだめだ。」と耳にたこができる程、いつも聞かされていました。

最近、伯父の友達めぐりをしています。ミネソタ、ミルウォーキー、クリーブランド、ピッツバーグ、ニューヨーク、シアトル、アリゾナ、ロサンゼルスなどそれぞれの都市で今でも伯父を懐かしんでくれる方々がいます。私が伯父から学んだものは野球の素晴らしさ、また、野球を通じた「友情」ではないかと思います。友達の絆というものは素晴らしく、時を経ても変わらないものと実感しています。今年、幸いにも伯父は殿堂入りの候補者リストに入ることができました。これも伯父の旧友の方々のお陰と心より感謝を申し上げ、私の野球との思い出の結びといたしたいと思います。ありがとうございます。

こんにちは図書室です

選手名鑑“昔と今”

今年も新しいシーズンが始まりました。本屋さんの店頭には何種類もの「選手名鑑」が並んでいます。今の選手名鑑は選手名と生年月日・身長・体重のほかに推定年俸、血液型、前年の成績などさまざまな情報がのっています。そこで今回は、当館で所蔵している主な選手名鑑をご紹介し、移り変わりを見ていきたいと思います。

〔戦前〕

● 全日本職業野球団の陣容

1936年4月発行。選手の出身校・年齢と身長・体重（尺貫）がのっているほか、戦力分析が充実しています。阪神の投手陣のなかで景浦投手が「球は速く、カーブも鋭いが、打者を正面から打ち取ろうとせず、相手の欠点をうまくついていく頭脳派投手」と説明されていて、豪快なイメージのある景浦選手の意外な一面を知ることもできます。

● 職業野球早わかり

1940年7月の発行。14ページの本ですが、球団の歌、1936年からの勝敗表、後楽園・甲子園・西宮の3球場の概要や入営中の選手などの情報がのっています。

球団の歌を見て驚いたことは、「金鯱の歌」の作詞が岡田源三郎さんであることです。岡田さんは1936年から1939年まで金鯱軍の監督をされた方で、監督自ら作詞をしたということになります。

● 春の日本野球

1942年4月発行。日本野球連盟史、8球団登録選士（当時は選士と言いました）、新陣容検討、春季戦の展望、最高殊勲選士列伝などの読み物が多く、全96ページは読みごたえがあります。

〔戦後〕

● ファン手帳

1948年に創刊し1997年には創刊50年を迎えました。最初は選手名、出身地、身長・体重（'58年まで尺貫法で表記）、前年度成績くらいの情報でしたが、野球用語の解説や歴代記録などが増えていきました。大きさも最初はタテ13cm×ヨコ6cmでしたが'97年にはタテ20cm×ヨコ11cmとなりました。'74年には「普通傷害保険」が特定の球場でつき、ファールボールなどの怪我に対応していました。現在は発行されていませんが、今出版されている選手名鑑の原型になったものと言えると思います。

● 週刊ベースボール

1959年3月から写真名鑑を掲載しています。最初は1球団1ページで30人ほどの選手しか紹介されていませんが、現在は5ページにわたり1球団約80人の監督・コーチ・選手を紹介しています。最近では名鑑の選手データをいろいろな角度から調査した“おもしろDATA”で、出身地ランキング、出身校・出身チームランキングなどがあり、野球を知らない人でも楽しめます。

● 12球団全選手カラー百科名鑑

雑誌「ホームラン」の増刊号。1977年版（当時は雑誌「ゴング」の増刊として出ていた）から推定年俸、1985年版から前年の退団者、1994年版から春夏の甲子園大会に出場などの情報が増え、野球観戦や個人のデータを調べるうえで便利な1冊です。

戦前の名鑑はわら半紙のような紙で、選手のデータは名前と年齢、背番号、出身校ぐらいですが、時代を反映するような情報が見られます。戦後はそれぞれの出版社が工夫し、選手のデータが充実してきました。ほかにも球場ガイドや歴代のタイトルホルダー、歴代記録などいろいろなデータを載せているので、球場での観戦だけではなく、記録を調べるのにも便利なものとなりました。

ここでご紹介した他にも、1960年代には「ベースボールマガジン」の付録の選手名鑑、「週刊読売」の増刊号の選手名鑑などいろいろありますので、ぜひ図書室でご覧下さい。

司書　小川　晶子

博物館からのお知らせ

【職員の異動】

≪事務局長≫

前事務局長の小林 二三男氏が２月29日付で退職し、後任に佐藤 宏が３月１日付で就任いたしました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

佐藤（さとう） 宏（ひろし） 略歴　昭和27年８月８日生まれ　岡山県出身

早稲田大学商学部卒業
昭和52年　㈱後楽園スタヂアム（現 ㈱東京ドーム）入社
平成12年　㈱札幌後楽園ホテル出向
平成15年　経営計画部長
平成16年　㈱後楽園フアイナンス出向
平成18年　㈱後楽園ロコモティヴ出向
平成20年　㈶野球体育博物館出向

≪学芸部　司書≫

山根 礼子氏が３月31日付で退職し、３月１日付で後任に茅根 拓が就任しました。

昨年12月に公募し、約60人の希望者のなかから選ばれました。

皆様との長いお付き合いをよろしくお願いいたします。

茅根（ちのね） 拓（たく） 略歴　昭和57年11月４日生まれ　茨城県出身

東海大学政治経済学部卒
聖徳大学で司書資格を取得し、茨城県笠間市立友部図書館に非常勤として勤務。
３月１日から当館の司書として勤務。

【企画展】

「世界に広がる野球」

会　期　開催中　6月22日㈰まで
会　場　野球体育博物館内 企画展示室

現在、約110の国および地域がIBAF（国際野球連盟）に加盟しており、世界中で野球がプレーされています。そして、今年８月に開催される北京オリンピックには、各大陸予選や最終予選を勝ち抜いた日本をはじめとする７チームと、開催国の中国が出場します。
今回の企画展ではIBAFの歴史をはじめ、加盟している国々や各種の国際大会、各国のプロ野球などを紹介します。

1975年
第２回インターコンチネンタルカップ
（カナダ）ポスター

準優勝の日本選手団のサイン入り。73年から開催されている国際大会。次回は2010年開催予定。

2004年アテネ五輪
野球競技出場国記念ピン

キューバが金メダル、オーストラリアが銀メダルを獲得した。日本は全選手プロで臨み、銅メダルを獲得。

【販売中！】

▶キーホルダー

今年３月に販売を開始した当館オリジナルのキーホルダーです。
価　格：500円（税込）
素　材：牛革貼合せ
サイズ：105mm×40mm
着　色：グリーン
箔押し：金色　　ご来館記念のお土産にどうぞ!!

▶公認球

毎年、大好評をいただいている公認球ですが、今年も博物館で販売をします！
価格 1,600円（税込）
博物館の受付で販売していますが、郵送希望の方は、「公認球希望」と明記の上、代金（公認球代+梱包送料）を現金書留で当博物館までご送付下さい。
公認球：１個 1,600円
梱包送料：１個 250円　２～３個 400円　４～６個 600円
送付先：〒112－0004 東京都文京区後楽１－３－61
財団法人野球体育博物館 公認球係
※７個以上お求めの方は、当博物館（TEL：03-3811-3600）までお問合せ下さい。

● 博物館のご案内

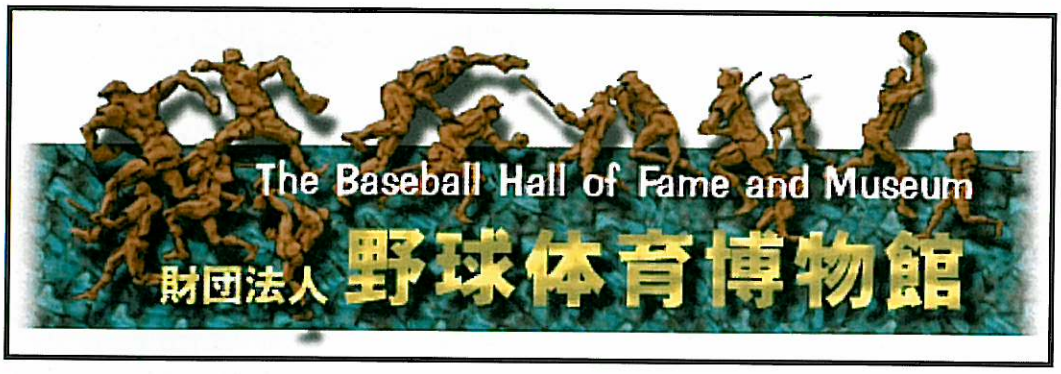
場　所　東京ドーム21ゲート右
開館時間　３月１日～９月30日　AM10時～PM６時
10月１日～２月末日　AM10時～PM５時
（入館は閉館の30分前まで）
入館料　大　人　500円（300円）
小・中学生　200円（150円）
（　）は20名以上の団体
65歳以上　300円
休館日　月曜日（祝日、プロ野球開催日、春・夏休み中の月曜日は開館）
年末・年始（12月29日～１月１日）

《５月・６月・７月の休館日》
５月　12日・19日
６月　２日・16日・23日・30日
７月　７日・14日

●編集後記　野球界の新しいシーズンが始まりました。今年もさまざまな資料や情報を集め、野球界とファンの皆さんの架け橋になるような博物館を目指しますので、どうぞよろしくお願いいたします。次回ニュースレターは殿堂入り表彰式の速報のため、発行が遅くなります。

Newsletter Vol.18 / No.1
2008年４月25日発行
編集・発行　財団法人　野球体育博物館
〒112－0004　東京都文京区後楽１－３－61
Tel　03（3811）3600　Fax　03（3811）5369
http://www.baseball-museum.or.jp/
定　価　100円

平成13年3月13日第三種郵便物許可　2008年4月25日発行　年4回（1、4、7、10月の25日発行）
Newsletter



Vol.18 / No.1

リレー随筆(32)

イマジネーション

競技者表彰委員会幹事　工藤　三郎（日本放送協会）

野球との最初の出会いは三角ベースだった。まだ小学校に入る前に、家の物置の脇にあった小さなスペースを使って、普段はせいぜい2人か3人で遊んでいた。兄たちの仲間に初めて加えてもらえた時の誇らしげな気分は今も微かに残っている。

三角ベースをやった経験のある方は憶えているだろう。人数が足りないときに子供たちが考え出した魔法のルールが「透明ランナー」である。攻撃側が一人しかいない時にヒットを打って出塁したら次のバッターがいなくなる。そこで登場するのが幻の代走「透明ランナー」だ。姿は見えなくとも塁上にランナーがいると想定して試合を続けるのである。

大人になって「透明ランナー」の話を出すと、不思議なことに東京で子供だった大人も、関西で子供だった大人も、みんな「透明ランナー」を知っていた。もちろん三角ベースのルールブックがあったわけはなく、ラジオで放送したわけでもなく、新聞で取り上げたとも聞いていない。野球を楽しみたいと思う子供心が日本中で同時に「透明ランナー」を発明したとしか考えられないのである。ユニフォームも買えない時代だったが、野球の中にイマジネーションが息づいていた。

私が三角ベースに興じていた昭和30年代の初めは、大ヒットした映画「三丁目の夕日」の時代に重なる。プロ野球は草創期から戦後最初の隆盛期を迎えていた頃だった。しかし、私が生まれ育った九州の地方都市では実際にプロ野球を見る機会などめったになかったし、映画と違ってテレビはあと数年待たなければ我が家にやって来なかった。

昭和33年の日本シリーズだった思う。神様、仏様、稲尾様の活躍を真空管式のラジオで父と一緒に聞いていたことを憶えている。少年雑誌の表紙を飾っていた稲尾さんの顔は知っていたが、詳しい試合展開などは分からないまま父の興奮に引きずられて自分も興奮していた。それからは背番号24を背負ったつもりになって家の前の石塀に向かってよくボールを投げた。ボールは舗装されていないデコボコの地面を跳ねて自分に戻ってくる。稲尾投手のように巨人打者を次々と打ち取っている気分になってくる。野球を聴いたあともイマジネーションを楽しんでいた。

ナイター、サヨナラホームラン、ランニングホームラン、ヘッドスライディング、猛打賞…日本で生まれた野球のことばである。ここにも先人達のイマジネーションがあったと感心させられる。

ナイターには日本の夏の夜の蒸し暑さにふさわしい語感があり、サヨナラホームランには劇的な結末に終焉の寂しさを重ねる心風景がある。ランニングホームランはベースを蹴ってダイヤモンドを駆けるランナーの姿と転々とする白いボールの躍動感が伝わってくる。ヘッドスライディングだからこそ周囲は奮い立つ。清岡卓行さんの創った猛打賞も大好きなことばだ。マルチヒットは単なる数字だが猛打賞には野球少年の憧れが秘められていると感じるからだ。

MLB、WBCにオリンピックと世界の野球を伝えることが多くなった。ボールカウントを「ツーボール・ワンストライク」というふうに旧来とは逆の伝え方も耳慣れてきた。世界中で通じる野球用語を使っていこうという方向は間違いではない。しかし、BASEBALLを野球と言い換えて始まった日本人と野球の付き合いの中で、日本人の感性がたくさんの野球のことばを生み出したことも忘れたくない。豊かなイマジネーションを日本の野球が失わないことを願っている。